

遊びの中で友達を意識する子の育成をめざして

小学部・中学年

1 はじめに

- (1) 中学年になると身体も大きくなり、行動も一段と活発になってきた。しかし、友達と一緒に遊ぶ、互いに刺戟し合って育つ姿がみられない。友達と一緒に居たとしても全く他に関係なくそれぞれが自分勝手なことをして遊んでいる。せっかく育った行動力を友達を意識させることにより、それをきっかけとして心身共にすこやかな成長が望めると考えた。
- (2) 自閉症の児童に対して、教師対児童の関係は約1ヶ月でできた。しかし、そこから発展させることは困難である。やっとできだした遊びを少しでも変えようとする、せっかくできた好ましい関係もその場で失われてしまう。このくり返しからぬけ切るためには、友達の存在に気づかせ、今まで友達を拒否してきた生活を変えなければならないと考えた。
- (3) 友達とかかわり合いをもつことは、自分の思いを相手に伝えることであり、その反応を受けとめることである。相手を意識させることによって、身辺自立の行為等も生き生きと主体的なものになっていくと考えた。

2 友達を意識する立場からの児童の実態(5月)

・K夫 9才 ガーゴイリズム

友達を意味もなくたたいたり、けったりして喜ぶ。よくしゃべるが全く自分勝手に、相手に関係なくことばを発しているので会話は成立しない。

・S夫 10才 自閉症

固執した行動が見られ、友達にはほとんど関心を示さない。同じことばを先生にだけくり返す。よく泣いているが特定な先生に特定な言動が受け入れられると笑顔をする。

・N夫 10才 自閉症

先生には甘えることがあるが友達には関心を示さないか恐れているように見える。表出言語はなく会話の意志もみられない。時々パニックを起こすが気嫌のよい時は指示に従う。

・M子 10才 脳性まひ

大人にだけは笑顔であいさつをするが友達にはしない。友達の中に入ろうとしているようだがふらふら自分勝手な行動をしている。会話が成立しないが感情はよく伝わる。

・O夫 10才 ダウン症

友達と遊べる唯一の子である。表出言語が乏しく発音不明瞭だが友達の気持ちをよくくみとって何とか意志は通じる。本テーマの指導の出発点となった子である。

・T夫 9才

感情のコントロールが苦手で、大あばれしたり大喜びしたりするがすぐ直り、友達に対しても明るく、いじめたりしない。自分ひとりで陽気に遊んでいて友達と何かするということはない。会話は一語文で何とかできる。

3 指導の実際

(1) 指導の方針

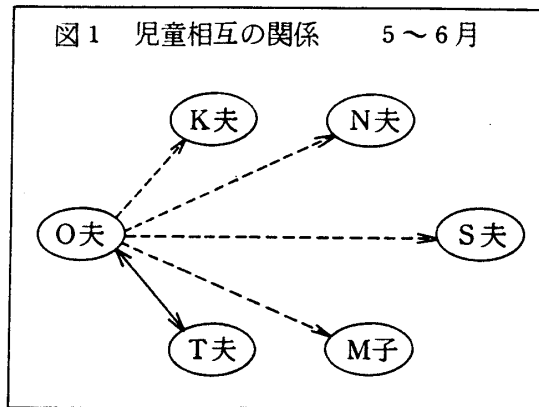
- ・相手を必要とする遊びを組み立てる。そのような芽がみられたらそれを伸ばす工夫をする。
- ・友達のことを手伝う、手伝ってもらえる等の機会を多くとり入れて友達を意識させる。
- ・給食は全員が配り、配ってない友達はないか確認させ、友達のことを気に付けさせる。
- ・朝と帰りのあいさつは、順番の時と、好きな友達を呼び出す時をつくり、きまりに従うことと、相手に呼びかけることをさせる。

(2) 指導の経過

① O夫が他の児童に働きかける頃(図1)

i O夫の行動

毎日、友達をいじめている。N夫にクレパスの使い方を教えるが反応がないのでたたく(4/14)とか、突然、T夫をたたいて泣かせておいて、後で「よしよし」と言って顔をふいてやる(4/24)等のようなことが観察された。



ii 指導の手だて

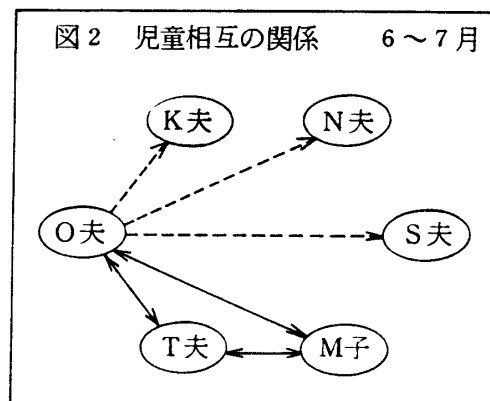
表出言語が少ないので、少々荒っぽい手段ではあるが、上述のような行動は遊び相手を求めているのだと考えた。そこで、友達といっしょに楽しめる遊び(例えば、電車ごっこ等)をさせて、互いに楽しさを感じとらせる工夫をした。何よりもまず、O夫以外の児童が友達とかかわり合いが持てるようにならなければいけないからである。

iii 遊びの中でのO夫の変容とT夫の出現

5月に入り、テレビを見ていると画面につられてT夫が踊り出し、すぐO夫も踊り、先生も中に入って、できるだけ長時間続けるように試みた。単純な跳びはねるだけのものだが、相手とできる唯一の遊びの楽しさを忘れさせてはいけないと考えたからである。自分達で作ったこの遊びは、他の児童も引きこんで遊ぶきっかけとなった。O夫はT夫とのかかわりが生まれるといじわるが止まり、お兄さんらしくなったとほめられることが多くなり、友達にもやさしくできだし、落ち着きを取りもどしてきた。

② O夫とT夫が遊ぶようになる頃(図2)

O夫は、宇宙戦艦ヤマトの歌が得意で動作をつけて歌うとT夫もそのようすをまねて歌う。O夫はさらにT夫にピンクレディーを教える。2人の間は非常に親しくなり、T夫は野球やすもう(写真)の遊



びをO夫に教え（一緒にして覚えたのだが）、
2人で楽しむことができ、遊びの種類も広がり
をみせた。M子もこの雰囲気引きこまれて、
自分でできること（むすんでひらいて）をして
仲間に入れるようになった。後でM子は、遊び
の意味がわかり、すもうを覚えた。



O、T、Mの三人で
すもうをしていると
ころ。

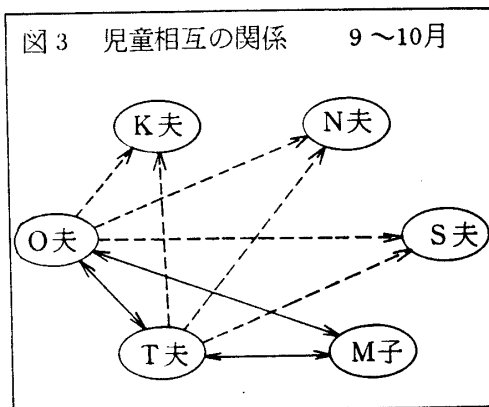
③ O夫とT夫が中心になって遊ぶ頃（図3）

O夫、T夫、M子の間で「どうぞ遊び」が生まれた。教室の入口でどうぞと言われたらドタバタと教室へかけこむだけのものである。この時も先生が中に入って、2つの入口を使うこと、戸を開けたり閉めたりすること等遊びを構成して一層楽しくした。動きのおそいM子はいつも入口の役で充分楽しんだ。

K夫は、走るところだけ走りまわることが、かえって
友達にじゃまをしている感じである。

N夫は、時々じっと見る。友達が近くを走ると喜
こんで走りまわることが遊びの意味はわかっていない。

この遊びは、O夫とT夫のテレビの時の踊りが発
展したものである。さらに発展して、「待て！」と
言って走る「おにごっこ」のようなものに変化した。

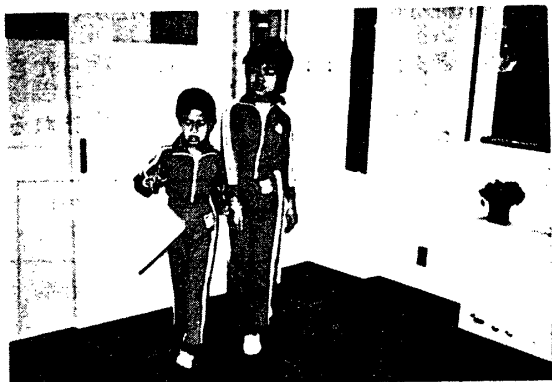


（鬼も決まっていないうし、つかまえたりもしない）時には全員6名が一緒にできることがあった。

④ T夫から他の児童に広がる頃（図4）

O夫とのかかわり合いが生まれたのをきっかけにT夫は、持ち前の行動力を発揮して生き生きと遊ぶことができた。さらに他の児童へも積極的に働きかけ、特にS夫とN夫に対しては明

らかな影響を及ぼした。



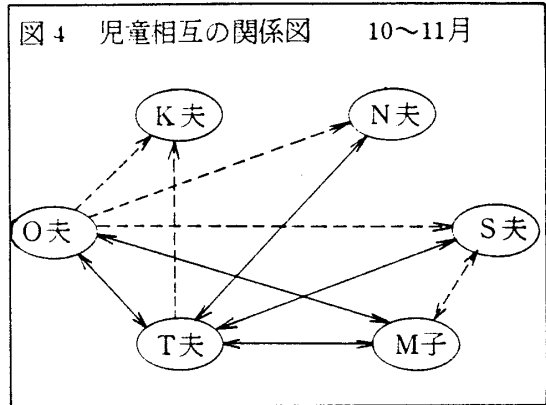
M子の手を引いてお使いするS夫

i T夫とS夫のかかわり

養護の先生に健康点検カードを持って保健室へ行く練習を毎朝、S夫にさせていた。9月の初め、先生に手を引かれてしていたが、いやがって泣いたりしているうち、できた後のほめられる喜びを感じたのか自分から先生と手をつなぐようになった。9月の終わり頃より、T夫が先生の代わりをしてくれた。

T夫がいない時も一人でできるようになり、やがて自分の仕事と思うのか頼まれなくてもできるようになった。さらに近くの部屋へのお使いだったらできるようになってきた。11月に入ると、M子やN夫の手を引いてよくなれている保健室へのお使ができた。S夫が友達の手にふれる

ことは大きな成長である。T夫とのかかわりはもっと進み、○や×を交互に書いてゲームのような遊びが2人の間だけでできた。ほめられると雑布がけもでき、K夫が泣いているとたたきに行く元気さえもできた。まだ自分対相手(1人)の関係が生まれたばかりだがもっと広がっていくと思われる。



ii T夫とN夫のかかわり

2学期頃よりT夫は、N夫がパニックを起こしかけるとブランコや自転車乗りに連れて行ってやる。T夫は、ブランコで気嫌が直るのを知っている。自分の方から働きかけることはできないがT夫だけは受け入れる。意志の伝達は、ことばでしないで、手をひっぱったり、かみついたりしていたが、時々水(がほしい)とか、しっこ等の単語で伝えるようになった。ことばが出た時は要求を聞き入れて、ことばを育てるようにしている。



自転車に乗せてもらうN夫

iii K夫と友だちとのかかわり

時々遊びの雰囲気につりこまれて入ってくるがすぐ離れてしまう。友達の話は非常に気になるのだが中へ入れないでいる。

4 まとめと考察

- (1) 友達とのかかわりをもたせようとする時、それぞれの小さな変化を認めたら、その時点からゆっくりと育てることが大切である。
- (2) 子どもの中から生まれた突発的なできごとを受けとめ、それを生かして指導に当たることが大切である。
- (3) 友達との関係を見逃せない場面を意識的につくり、指導していくことが大切である。
- (4) 指導にかかわって、それぞれが個性的な受けとめ方をしている。それぞれの個性に合わせて指導することが大切である。そのためには暖かい児童理解が大きな前提となってくる。